

会場計画の概要

1 会場計画の基本方針

・サブテーマの各視点と、自然に根ざした解決策（NbS：Nature-based Solutions）の手法をかけ合わせながら、緑の力を改めて感じ、緑を通じて幸せを感じる会場を創出することを会場計画の基本方針とする。

メインテーマ **幸せを創る明日の風景**

サブテーマ **自然との調和** **緑や農による共存** **新産業の創出** **連携による解決**

基本方針

※IUCNによるNbSの定義

社会課題に効果的かつ順応的に対処し、**人間の幸福**および生物多様性による恩恵を同時にもたらす、自然の、そして、人為的に改変された**生態系の保護**、**持続可能な管理**、**回復**のための行動

生態系の保護

(1) 緑と農の基盤に展開される会場

- ・既存の自然環境ポテンシャルを高め、豊かな緑や農の力が最大限発揮できる基盤を整備する。
- ・これにより、テーマ発信や様々な活動、新たな産業創出といったNbSの考えに沿った展開の基礎となる会場をつくる。

人間の幸福

(2) 環境に沿ったテーマ発信と連携（参加）が生まれる会場

- ・高い環境性能を見出した舞台に、緑や農の力の再認識、社会課題の解決に導くテーマ発信を行う。
- ・来場者同士、出展者同士、来場者と出展者が繋がり、様々な連携を生む会場をつくる。
- ・NbSの基盤をなし、花や緑の重要性を知る「ゾーン」と、NbSの実践、実験、共有を行う「ビレッジ」のエリア展開により、NbSの主流化へ導く仕掛けをつくる。

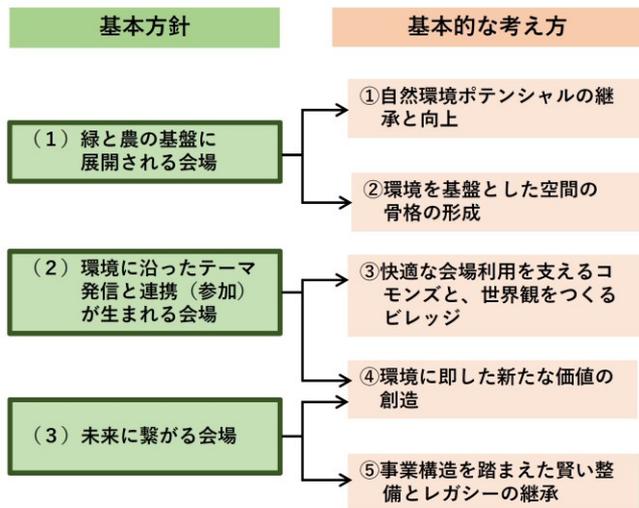
生態系の持続可能な管理、回復

(3) 未来に繋がる会場

- ・花や緑、農との関わりを通じて新たな価値の体験を通じて、課題を自分ごとと捉え、行動変容に繋がるきっかけをつくる。
- ・高い環境性能を持つ基盤と、博覧会で生まれた参加・交流の仕組みがしっかりと継承される会場をつくる。
- ・これにより、NbSの主流化に不可欠な、持続可能な発展のためにあるべき取り組みの方向性を知る。

2 会場計画の基本的な考え方

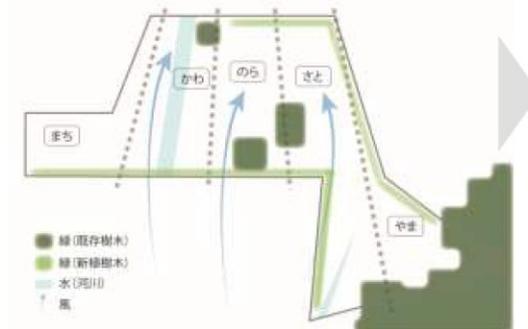
基本方針から導いた、会場全体のレイアウト、諸施設の配置やつくり方に関わる基本的な考え方を示す。



基本方針から導く基本的な考え方

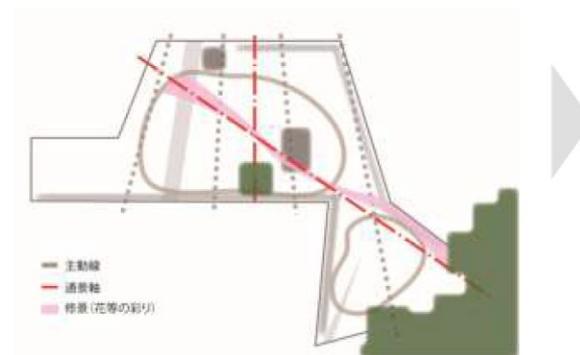
① 自然環境ポテンシャルの継承と向上

- ・今ある自然環境ポテンシャルを残し、活かす。
- ・豊かな環境を活かすため、地域の風土を象徴する「まち・かわ・のら・さと・やま」5つのエリアを会場に設定。日本が誇る共生の思想を国際社会に広く伝える基盤を形成。



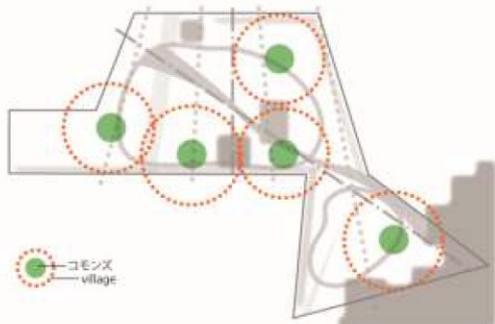
② 環境を基盤とした空間の骨格の形成

- ・既存の自然環境と、新たに加える花と緑によって魅力ある風景をつくる。



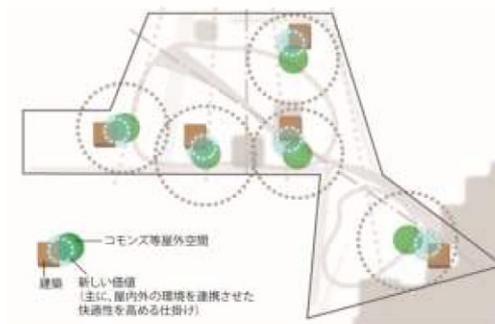
③ 快適な会場利用を支える commons と、世界観をつくるビレッジ

- ・環境を高めたところを、来場者が心地よく安らぐ“commons”に設定。
- ・commonsを中心に多様な展示や出展が寄り合い、基盤の環境特性に紐づいたコンセプトを持つビレッジを形成。ビレッジごとに、博覧会テーマの理解や気づきに繋げる世界観をつくっていく。



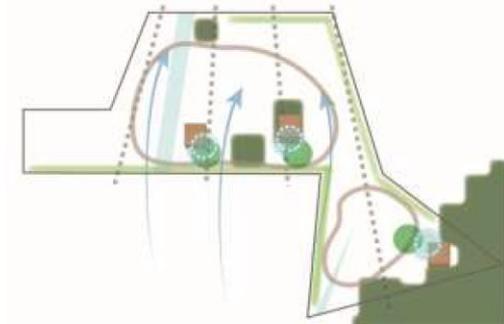
④ 環境に即した新たな価値の創造

- ・博覧会が目指す自然と折り合った社会のあり方を、“新しい価値”として感じてもらうため、体感を通じて気づきを得られるさまざまな仕掛けを取り入れる。



⑤ 事業構造を踏まえた賢い整備とレガシーの継承

- ・環境ポテンシャルを着実に将来へ継承する。
- ・大規模な仮設整備を伴うことから、公園事業など関連事業と適切な整備分担を行うとともに、多用途への転用など、無駄のない整備を考える。
- ・ハードだけでなく、博覧会で高まった気運を維持し、様々な取組がレガシーとして継承される工夫を取り入れる。



2 会場計画の基本的な考え方

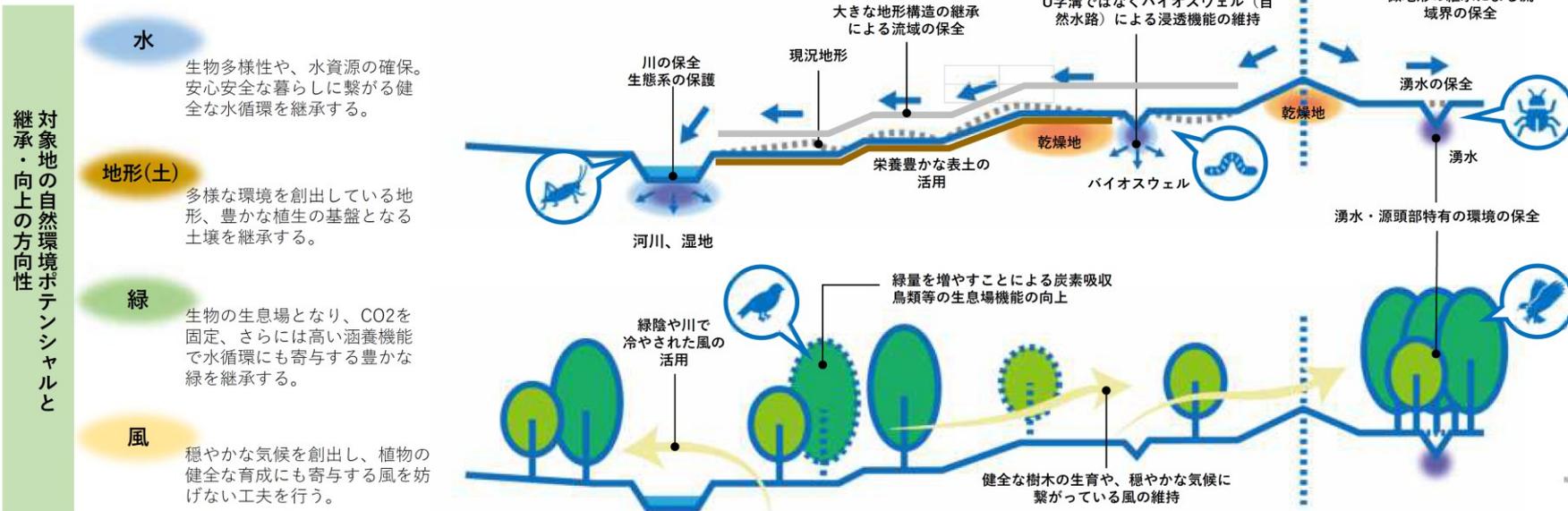
①自然環境ポテンシャルの継承と向上

- ・今ある自然を残し、活かすNbSの原則に従い、既存の自然環境ポテンシャルを大切にされた整備を行う。
- ・水、地形・土、緑、風の視点から、高いポテンシャルに繋がっている要素を残し、NbSで取り組まれる社会課題の解決のヒントになるような活用を検討する。
- ・また、地域の風土を象徴する「まち・かわ・のら・さと・やま」の5つのエリアを会場に設定。日本が誇る共生の思想を国際社会に広く伝える基盤を形成する。
- ・各エリアには、それぞれの環境に関わる社会課題を紐づけ、課題解決の方向性を示唆。関係者が一貫した取り組みを進めていく基礎とする。

本博覧会場で継承する自然環境ポテンシャルと、解決すべき社会課題との関係

視点	ポテンシャルに繋がっている対象地の環境要素	NbSで取り組まれる主要な社会課題						
		気候変動	自然災害	社会と経済の発展	人間の健康	食料安全保障	水の安全保障	環境劣化と生物多様性損失
水	・湧水						○	○
	・河川流量						○	○
	・多様な生物が棲む湿性の環境							○
地形・土	・浸透性の高い土壌		○				○	
	・湿地から乾燥地まで多様な環境をつくる地形							○
緑	・涵養機能を高める樹木		○				○	
	・CO2低減に資する豊かな緑量	○						
	・農的な環境			○		○		
風	・健全な樹木の生育や、新鮮な空気の維持に繋がる風				○			

地域の風土を象徴するエリア設定	エリアの特徴				
	まち	かわ	のら	さと	やま
エリアの特徴	・新しい造成地	・相沢川	・かつての耕作地の面影を残す開放的な平坦地 ・点在する既存樹木	・かつての武相国境であった分水嶺	・既存樹林、斜面地形 ・市民の森 ・和泉川
エリアに紐づく身近な社会課題	・空き家・空き地 ・ヒートアイランド現象 ・ゲリラ豪雨（内水氾濫）	・大雨による河川氾濫 ・水質汚染	・農地の土壌汚染 ・気候変動による作物生産への影響	・都市農地の減少 ・耕作放棄地の増加 ・上記に伴う生物多様性の低下	・豪雨による土砂災害 ・里山の荒廃 ・林業衰退 ・山林火災

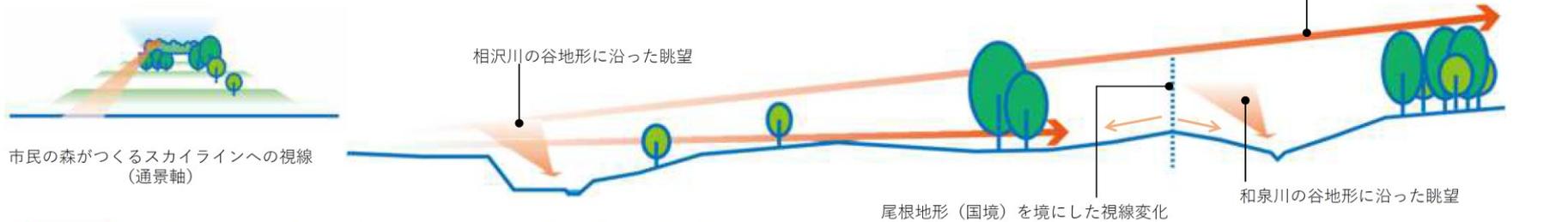


②環境を基盤とした空間の骨格の形成

- ・既存の環境要素と、新たに加える花と緑を基盤として、魅力ある風景をつくる。
- ・視点と視対象の関係から、遠景、中景、中・近景の3種に分類し、それぞれ下記の通りに魅力ある風景を形成する。

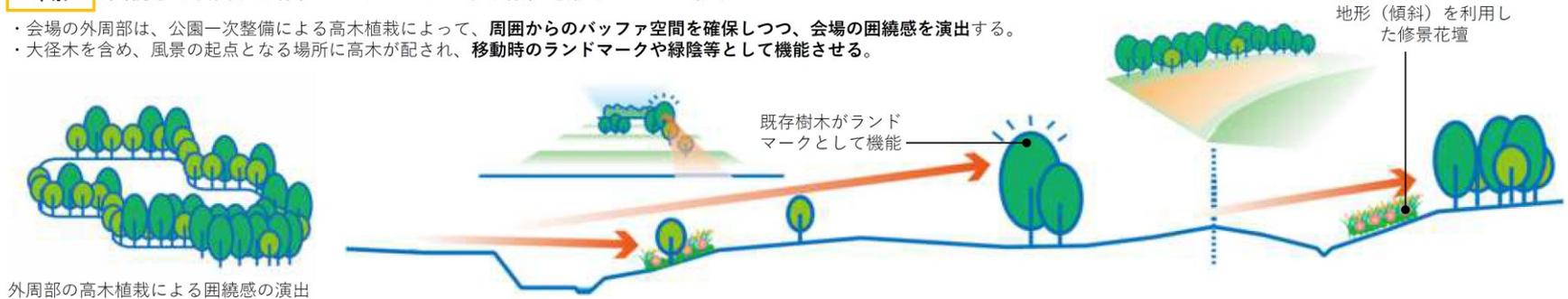
遠景 骨格となる環境要素と、それらを繋ぐ主動線

- ・継承した環境要素を尊重し空間の骨格を形成する。市民の森がつくるスカイラインへの視線と桑の杜に至る視線、南北にのびる相沢川や和泉川の谷地形に沿った眺望等を会場の風景の骨格（様々な施設等が配置される中でも特に尊重するもの）に位置付ける。



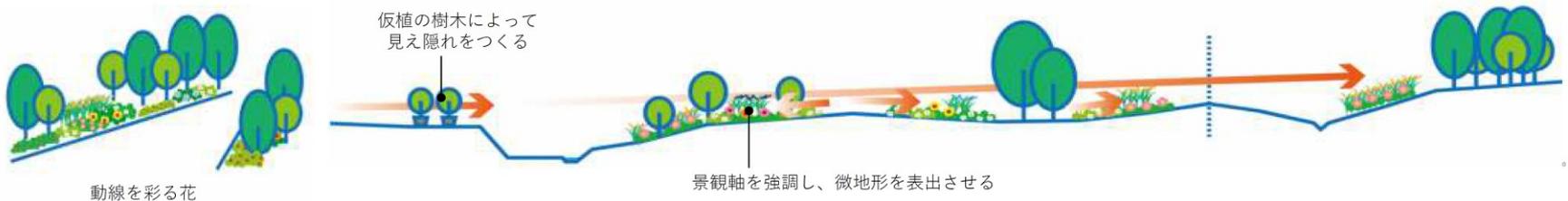
中景 囲繞感を演出する緑、ランドマークとなる緑、地形を生かした彩り

- ・会場の外周部は、公園一次整備による高木植栽によって、周囲からのバッファ空間を確保しつつ、会場の囲繞感を演出する。
- ・大径木を含め、風景の起点となる場所に高木が配され、移動時のランドマークや緑陰等として機能させる。



中・近景 軸を強調し、動線を彩る花。見え隠れをつくり風景に変化を与える緑

- ・会場全体を繋ぐ花の彩りが、圧倒的な華やかさと会場全体の統一感を与え、会場の奥へと来場者を誘導する。
- ・花の彩りが、上瀬谷の台地の微地形を表出させ、多様な展示・出展等が配される中で風景を引き締めていく。
- ・花の修景のみならず、水みちとなるスウェルなど、様々なものが修景要素としていく。
- ・その中でも景観軸沿いの花の彩りが中心となり、様々な修景要素を束ね、博覧会の彩りを紡いでいく。
- ・圧倒的な量感で入場後に目を引く主催者修景1と、軸を強調する修景2、沿道を彩る主催者修景3が機能しながら、花の博覧会としての魅力を高める。（各修景の詳細は次頁以降を参照）
- ・また、樹木による見え隠れをつくることで、シークエンスに変化を与えたり、期待感のある風景を創っていく。



②環境を基盤とした空間の骨格の形成

(1) 骨格となる環境要素と、それらを繋ぐ主動線 (遠景)

メインゲートから市民の森のスカイラインへ至る通景軸

上瀬谷の奥行が最も感じられる軸。会場を特徴づける様々な要素を横断する。また、会場のピーク（標高の最高点）へ向かって伸び、市民の森が創り出すスカイラインが確認できる。

相沢川沿いの谷地形

周囲よりも4~5m程度低く、南北の抜けのある景を創出。

桑の杜へ至る南北軸

会場の中央を通り、桑の杜へ向かって伸びる軸。自然を敬う日本人の自然観を表す桑の杜へ意識を向け、日本で開催される博覧会を印象づける象徴性の高い軸となる。

■まとまりのある既存樹群

計画地の中央にある既存樹群
広がりある空間のアクセントとなっている。
かつての通信塔の跡地である桑の既存樹群は、象徴的な様相を呈している

■和泉川沿いの谷地形

緩やかに下がる谷地形であり、蛇行する和泉川に沿って変化のある風景を創出している

■国境

会場の北東部を通るかつての国境のラインは、微高地となっており、ラインを境に地形がねじれるように展開している。微細な地形変化だが、変化のあるシーケンスを提供できる要素である

■市民の森

会場東端にある市民の森は、会場のどこにいても遠景として眺めることができ、会場を緑で縁取るスカイラインを提供している

②環境を基盤とした空間の骨格の形成

(2) 囲繞感を演出する緑、ランドマークとなる緑、地形を活かした彩り (中景)

A3 5-1:4000
: コモンズ

■地形を活かした彩り

地形変化を活かして、“見下げ”“見上げ”といった見せ方の工夫をとり入れ、花を印象的に魅せていく。

■外周部は、新植（公園事業による）によって、周囲からのバッファ空間を確保しつつ、会場の囲繞感を演出する。

■大径木を含め、風景の起点となる場所に新植（公園事業による）が配され、移動時のランドマークや緑陰等として機能する。

■市民の森は、緑に囲まれた安心感のある風景を創出する。

※計画平面図は令和5年7月時点のものであり、今後変更する可能性があります。

②環境を基盤とした空間の骨格の形成

(3) 軸を強調し、動線を彩る花。見え隠れをつくり風景に変化を与える緑（中景～近景）

